

『カレジャヴァ物語』における宗教的共生の夢

永瀬 春男

近代ヨーロッパはユートピア架空旅行記の数多い誕生を見た。なかでも17～18世紀のフランスは、時代の危機的様相を反映するかのようになり、その最も多産な国のひとつとなった。17世紀末以降の百数十年間に限っても、フランス一国で書かれたこの種の書物は百点を超えるという¹。これらの物語群には、虚構の形を借りつつも、同時代の政治的・社会的・宗教的現実に対する直接間接の批判と、著者たちの理想とするあり方が盛り込まれた。それらの理想と既存の諸制度との対立や共生の問題が、重要な主題を構成することは、当然予想されよう。ではこれらの主題は、実際にどのように描かれ、論じられたのであろうか。本稿では、こうした問題意識のもと、1700年に登場した作品『カレジャヴァ物語』を検討してみたい。広く知られた作品ではないため、作者と物語内容についての紹介も含めて論じることとする²。

I 作者と作品刊行のいきさつ

フランス語によるユートピア旅行記『カレジャヴァ物語、あるいは理性ある人々の島の物語³』は、1700年に著者名も発行者名も付さずに印刷された。扉には表題と刊行年のみが記載されている。この匿名出版物の著者はディジョンの弁護士クロード・ジルベール (Claude Gilbert, 1652-1720)、出版は同市のジャン・レセール書店であったが、後難を恐れて両者の名前を掲げなかった。一般に虚構のユートピア物語に対しては、権力も比較的寛大であったといわれる。しかし宗教的に大胆な主張を含む『カレジャヴァ物語』の場合は、いっそうの慎重さを要したであろうし、地方都市での出版には、パリ以上の制約が働いたものと思われる。

¹ この時期におけるユートピア物語の隆盛の理由、およびその諸相について、次の論文を参照。赤木昭三「17世紀フランスのユートピア旅行記」、『ユートピア旅行記叢書』、第1巻 (『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』)、岩波書店、1996年、325-352頁。また、次の論文によれば、1700-1798年の間にフランス語で出版された広義のユートピア旅行記は80点にのぼるという。中川久定「フランスのユートピア旅行記-18世紀の場合-」、『転倒の島 18世紀フランス文学史の諸断面』、岩波書店、2002年、190頁。

² 以下、本稿の一部 (第I～IV節) は、筆者による次の「解説」を下敷きとし、加筆修正と注を加えたもの。第V節は新稿である。「『カレジャヴァ物語』について」、『ユートピア旅行記叢書』、第5巻、岩波書店、1998年、497-511頁。

³ *Histoire de Calejava ou de L'Isle des Hommes raisonnables. Avec le parallele de leur Morale et du Christianisme*, M. DCC [1700]. 本稿で使用した版本と翻訳については、本稿末尾に記載。

原著は12折判の小型本で、本文は329頁、別に巻末に目次、索引、正誤表の計7頁が付いている。ただし、この初版本は、印刷後にごく少数を残して著者が焼却処分にしたため、一般に流布することはなかった。この焼却を免れたうちの1冊が、現存する唯一の刊本としてパリの国立図書館にあり、稀覯本として特別資料室に別置されている（一般利用者の閲覧はマイクロフィルムによる）。

著者クロード・ジルベールの生涯について知られるところは極めて乏しい。その情報のほぼすべては、ジルベール家の知人で、『ブルゴーニュ作家文庫』（1742）の著者フィリベール・パピヨン（1666-1738）が同書に記した簡単な記述⁴に由来しており、近年のフランスにおける各種の文学辞典類にも、それ以上の新しい事実は見あたらない⁵。パピヨンはディジョンの高等法院判事、同地のアカデミー会員で、博識の史家でもあり、上記の主著はブルゴーニュ出身の作家の網羅的な目録として、情報の豊富さと正確さにおいて評価の高いものという。

その記述によれば、ジルベールは1652年6月7日、父フィリップ・ジルベールと母マルグリット・パンの息子として、ブルゴーニュ地方のディジョン（現コート・ドール県の県都）に生まれ、1720年2月18日に同地で没した。本業は弁護士であり、『カレジャヴァ物語』以外の作品として、法律に関する著述一点の草稿があったといわれるが、死後失われた。結局、ジルベールは『カレジャヴァ物語』一作により、文学史に名を留め、同時代に隆盛を見たユートピア文学と自由思想の歴史のなかに独自の位置を占めることとなった。

作者の経歴が作品に反映している点としては、まず法こそ市民社会の基盤だという考えが、作品に一貫して見られることがあげられよう。加えて、『カレジャヴァ物語』には相対的に法律への言及が多いといえる。離婚問題に関して『ローマ法大全』や教会法の条文が援用される箇所（第11巻）などは、法曹家としての知識が生かされたケースである。また、ジルベールが多くの著作（聖書とコーランを初めとし、ホメロス、プラトン、キケロ、ルクレティウス、セネカらの古典、デカルト、ホッブズ、ニコル、マルブランシュ、ピエール・ベールなど同時代の思想家）に通じた教養人であることは、作品の随所に見られる直接間接の言及から窺うことができる。

前記パピヨンの記述によれば、本書は刊行時において既に完全な状態ではなく、大胆にすぎると判断された箇所が印刷段階で削除されていた。これがタイトルのみ残る第7巻「ユダヤ教につ

4 パピヨンの記述の全文は、例えば次の書を参照。Frédéric Lachèvre, *Les successeurs de Cyrano de Bergerac*, Slatkine Reprints, 1968 (réimpression de l'édition de 1922), p. 210.

5 以下、この節の終わりまでのジルベールに関する記述は、主として Claude Gilbert, *Histoire de Calejava ou de L'Isle des Hommes raisonnables*, édition critique par Marc Serge Rivière, University of Exeter, 1990 に付された編者リヴィエールの解説による。本稿ではこの版を底本とし、HC と略記する。頁数の指示がローマ数字の場合は編者解説である。また次の邦訳解説も参考になる。野沢協「カレジャヴァまたは合理人の島の物語」、野沢協・植田祐次監修『啓蒙のユートピア』、第1巻、法政大学出版局、1996年、934-944頁。

いて」と、第8巻「キリスト教について」である（ただし、2つの巻が最初から書かれていなかった可能性も皆無ではない）。著者の自主規制はこれだけに留まらず、彼がパピヨンに言明したところによれば、印刷された刊本は1冊だけを残し、ことごとく火中に投じられたという。匿名や危険箇所の削除、また後述するような責任回避のための作品構成上の素朴な仕掛け——こうした処理も慎重な作者に十分な安心を与えなかったのである。

著者の死後、未亡人は残った1冊も焼却しようとしたが、懇請を受けてパピヨンに譲渡した。彼はこれを元に忠実な筆写本を作成し、この手書き草稿は、今日ディジョン市の市立図書館に保存されている⁶。この写本（筆者は未見）は目次や原注も含め、印刷本を正確に写し取っているという。もちろん印刷本を元に著者の死後作られた写本である以上、テキストの決定にあたって依拠すべきは印刷本の方であり、異文の問題は生じようがない。

ところが、この写本はひとつ注目すべき点を含んでいる。すなわち、その最終頁には、「理性的な宗教の草案」と題された、原本にはない12箇条の文章（後述）が記されているのである⁷。パピヨンは、この「草案」の前に、「以下の記述は本の最後に手書きしてあり、私はそれが著者の筆跡だと思う」と注記している。しかしこのような書き込みは国立図書館蔵の刊本には見あたらない。つまりパピヨンが譲られた印刷本は国立図書館蔵のものとは別物であり、その後失われたことになる。とすれば、ジルベールの「1冊のみ残した」という証言は間違いで、焼却を免れた刊本は少なくとも2冊あったか、または版元が著者に内緒で何部かを手許に残していたことになろうが、真相は不明である。ともあれこうした理由から、この作品は後代の研究と再評価の対象となるよう運命づけられ、同時代に読者を得ることはなかったのである。

II 物語の構成

『カレジャヴァ物語』は一人称の「私」を語り手としている。同時代のフランスにおけるユートピア小説の多くにおいて、一人称の語り手はユートピアへの旅行者自身であり、作品はその手記ないし回想録という体裁をとる⁸のに対し、本作品は多少趣を異にしている。すなわちこの書物は、語り手の「私」が何らかの経路で入手した「回想録」を適宜省略し、いわば編集の手を加えて刊行するものとされている。主要な登場人物3名が書き残したこの「回想録」がフランスに伝わった経緯と、語り手が公刊を思い立った理由とは、作品の最後にごく簡単に記されている。主要人物のひとりクリストフィルが持ち帰った無秩序な紙の束を、彼の縁者が整理して脈絡のある記録に仕上げ、さらにそれを語り手の「私」が大幅に縮めた上で紹介するというのである⁹。

⁶ Bibliothèque municipale de Dijon, Ms PF 973 (Fonds Baudot). Cf. HC, p. VI.

⁷ この書き込みのある頁の写真版は、HC, p. 2 を参照。

⁸ 例えば、前掲の『ユートピア旅行記叢書』、第3～5巻収録の諸作品を参照。

つまり「私」は物語内容から二重に隔てられていることになる。

こうした素朴な仕掛けは、物語に真実らしさを与えようとする意図（回想録の資料的価値を保証することでその内容の信憑性を確立する）に発すると同時に、作品の思想内容に対する語り手の責任回避と中立性を装うための手段（「私」は紹介者・語り手に過ぎず、回想録の執筆者でも発話者たる登場人物でもない）でもあったろう¹⁰。この語り手は、物語の始めと終わりのほか、その進行途中でも時たま顔をのぞかせ、短い感想を差し挟んだりするものの、概ね背後に退いて語り手の役割に徹し、物語の中心は回想録の記述に委ねられる。仔細に見ればこうした構成法は厳密に貫徹されているわけではなく、「私」の語りの部分と「回想録」による物語の境界が時に曖昧になることがあるが、文学者でない作者にとってはやむを得ぬことであったと想像される。

作品の真実らしさを保証する手段として、現実的要素の導入と描写における現実味の付与という問題にも触れておこう。前者は同時代の歴史的あるいは地理的事実の指示であり、ナントの勅令廃止（1685年）への言及は、最も具体的に物語の立つ時点を絞り込む手がかりとなっている。地理的事実としては、もっぱらリトアニアという地名がこの効果を引き受けている。はるか大海の彼方に設定されることも多いユートピアを、ジルベールは周辺部とはいえヨーロッパのうちに置いた点で異色といえる¹¹。当時リトアニアはポーランド領であり、フランスから見ればヨーロッパの辺境ながら、耳に馴染みのない地域ではない。カレジャヴァ島はこのリトアニアを流れる大河で船に乗り、2カ月少々の航海で到着できる地点に置かれている。おそらくバルト海のどこかの地点が想定されていると思われる。しかもカレジャヴァは決してヨーロッパ世界と隔絶した地ではなく、定期的に物産を仕入れに使節がヨーロッパに出かけ、各地の事情に通じて有益な点は取り入れるように努めている。ラテン語を初めとして幾つもの言語が習得され、外国語を専門に学ぶ若者たちはいずれ海外へ派遣される制度になっている。また、カレジャヴァにはホメロスを初めとして幾つかの作品の翻訳まで存在する。侵略を恐れて異邦人の来訪には門戸を閉ざしているものの、自分たちの方からは接触を継続しているのである。

次に、自然や風物の具体的な描写による現実味の付与についてはどうであろうか。著者のこの方面への配慮は、物語的要素に富む第一巻においてはまだしも、それを過ぎると急速にしぼんでしまう。カレジャヴァ島の描写なども至っておざなりで、「途中には美しい並木が続き、木々の

9 HC, p. 82; 『カレジャヴァ物語』、拙訳、『ユートピア旅行記叢書』、第5巻、岩波書店、1998年、118頁（以下この邦訳を『カレジャヴァ』と略記する）。

10 Cf. Lise Leibacher-Ouvrard, *Libertinage et utopies sous le règne de Louis XIV*, Droz, 1989, pp. 174–175.

11 ユートピアの場所をどこに設定するかについては、(1)宇宙への上昇、(2)地下への下降、(3)横への水平移動、さらには(4)時間軸上の移動など、いくつかの型がある。これについては、前掲赤木論文、および中川論文を参照。航海によって到達できるカレジャヴァ国は、(3)の型のなかでも相対的に近い位置に置かれている。

あいだにはあらゆる種類の花々が、散歩したり旅したりする者の目を楽しませていた¹²⁾」といった記述が思い出したように挿入されはするが、たちまち抽象的議論のなかに埋もれて姿を消してしまう。

作品の時間構成についても見ておこう。語りにとっての「現在」をほぼ作品刊行の時点(1700年)とすれば、作品冒頭と最終部で語り手が位置するのがこの現在時点であり、物語が展開するのは3つの過去の時間においてである。まず語り手はカレジャヴァ共和国の成立の事情から物語を開始する(第1巻、第1部)が、それは「今から800年ないし900年前のこと¹³⁾」とされており、これが作品中で一番古い過去の時間である。次に、クリストフィルらの一行がフランスを捨てて旅に出、カレジャヴァ島に到着するまでの期間(第1巻、第2部)があり、一行の出発はナントの勅令廃止に少し先立つ時点に設定されている。第3の時間は、一行がカレジャヴァ島に到着してから、そのうちの2人が帰国するまでに相当し、作品の主要部分はこの時間に属している。この期間がどの程度の長さになるのかを判断する明確な手がかりはなく、作者はこうした点にはまったく無頓着である。

物語の内容は、当然以上の3つの時間に依じて様相を異にする。第1はカレジャヴァの国のいわば起源譚である。物語の舞台となる島は古くはマロティという名であった。ところが隣国で王の不興を買った医師のアヴァなる人物が、多数の近親者を引き連れて亡命してきたことから国の変貌が始まる。多少の経緯の後、アヴァはマロティの王カクミゾンと深い友情で結ばれることになる。やがてアヴァが制定を求めて故国を追われる原因となった市民平等の法律が施行され、マロティは共和国に変わる。こうして、当初は新住民たちが住む山の呼称に過ぎなかった「カレジャヴァ」(アヴァの土地、の意)の名が、ついには国全体の名前となる。しかも偶然なことに、現地の言葉で「アヴァ」は「人間」の意味であり、「カレジャヴァ」は「人間の土地」を意味するのであった。これが「今から800年ないし900年前」の出来事である。

こうして成立したカレジャヴァ国を、17世紀の終わり近く、主人公たちヨーロッパ人一行がひょんな偶然から訪れることになる。彼らの出国からカレジャヴァ到着までの出来事が、第2の時間を構成する。

一行はフランスの新教徒クリストフィルを頭に、その娘ウードクスと娘婿のアラートル、それにリトアニア旅行のためにおそらく現地採用された案内人サミエスキの4人である。熱心な新教徒のクリストフィル(「キリスト愛好」を意味する名前¹⁴⁾)がフランスを捨てた理由は、ナントの勅令の廃止を間近に控え、過酷さを増していく祖国の宗教政策にあった。事実フランスでは、1680

¹²⁾ HC, p. 19; 『カレジャヴァ』、31頁。

¹³⁾ Ibid., p. 3; 同書、4頁。

¹⁴⁾ 以下、人物名の意味については、編者解説による。Ibid., p. XIX.

年代に入り、龍騎兵（ドラゴン dragon）らの一団による暴力と脅迫をもってする改宗の強制（ドラゴナード dragonnades）が頻発する。「人が偽りだと思っている宗教を、良心に反して無理やり信じさせようとし、論拠をあげて説得するかわりに脅迫と刑罰を用いる輩¹⁵」というクリストフィルの憤りには、こうした現実的背景が存在したのである。

娘婿のアラートル（「反・礼拝」の意味）はすぐれた哲学者、数学者、法学者という大変な教養人であり、「信仰心は厚いと言えないが、信義と誠実には富んでいて、すべてを先入見なしに正しく判断できる人物¹⁶」とされている。アラートルがクリストフィルと行動をとにする羽目になったのは、従妹のウッドクスを愛し、別れたくなかったからである。ウッドクス（「善き意見」の意味）はといえば、当初は新教を奉ずる父親と旧教を奉ずる母親のあいだで揺れ動き、極度に迷信深い娘であったと紹介される。しかしながら、彼女は「最も高度な学問をもよくこなす¹⁷」知性の持ち主でもあり、カレジャヴァでの見聞を経た後、第11巻に至るや、キリスト教の新解釈を、ギリシア語とラテン語の聖書の章句を援用しつつ、長々と弁じ立てることになる。こうした人物設定にはかなりの不自然さが感じられるが、文学の素人に過ぎない弁護士ジルベールにとって、思想の開陳に性急なあまり、登場人物の造形に多少の手拔かりが生じるのは無理からぬことであつたろう。最後に、一行の案内人サミエスキはトルコ出身の「熱心なマホメット教徒」であり、「知性と学識にも欠けてはいない¹⁸」人物とされている。以上、それぞれに象徴的な名前をもつ人物たち（サミエスキの名前の意味については不明）は、やがてカレジャヴァでの議論のなかで、各自の主義信条に応じた役割を担うことになる。

一行は冬期のリトアニアを旅行中に遭難し、櫓を失い食糧も底を突いてしまうが、折り良く行き合ったアヴァ人たちの船に救われ、彼らの国を訪問することとなる。なかにもひとりのアヴァ人（名前としては島の制度に従って7・53という番号しかもたないので、物語中では単に「アヴァ人」とのみ呼ばれる）がアラートルと意気投合し、一行を島に引き留めるべく尽力することになる。『カレジャヴァ物語』に多少ともロマネスクな要素があるとすれば、この段階（第1巻、第3部）までであり、この後一行がカレジャヴァに入国してからは、作品はひたすら抽象的議論に終始する。『カレジャヴァ物語』は、作者が想像力の翼を自由に拡げる類の作品とは異なっている。

以下、第2巻から第12巻末尾で語りが再度現在の時間に戻るまで、物語の主要部分を構成するのは、未知の国での若干の見聞と、何よりもくだんのアヴァ人を加えた5人の人物たちの議論、それも大半は哲学的・神学的議論なのである。この議論を経て、アラートルとウッドクスは次第

15 Ibid., p. 65; 『カレジャヴァ』、89頁。

16 Ibid., p. 6; 同書、8頁。

17 Ibid., p. 5; 同上。

18 Ibid., p. 7; 同書、11頁。

にアヴァ人の考えに共鳴し影響されて、島への定住を決意するが、新教徒クリストフィルとイスラム教徒サミエスキの2人は、「不信心の徒¹⁹⁾」とは共に暮らせないとして島を去ることになる。

Ⅲ カレジャヴァ国の諸制度

カレジャヴァ島の所在地は秘密にされている。これは新しく「発見」した国々に対するヨーロッパ人の所業を知る住民たちの警戒心のためである。島の防御はぐるりを囲む城壁ひとつに委ねられ、そこに監視が置かれているに過ぎないが、アヴァ人は強力な毒ガスの製法を握っており、外敵が侵略することは不可能に近い²⁰⁾。この島で住民は至極幸福に暮らしているが、その幸福は奢侈や虚飾とは無縁のもので、健康で足るを知る生活にある。「必要なものを所有し、できる範囲で快適さにも与ること²¹⁾」、これこそ自然に適った本当の幸福であるとされる。彼らはまた理性を何よりも尊重し、常に理性の研鑽に余念がなく、自分たちこそ地上で唯一理性を具えた人間であると誇っている²²⁾。

このユートピアの政治的・社会的側面の紹介には、第5巻「アヴァ人の様々な習慣について」が当てられている。土地の耕作(第1の対話)、社会制度(第2の対話)、結婚(第3の対話)、子供の教育(第4の対話)と、興味深い項目が並ぶものの、記述は簡略に留まり、理論的深まりを欠いている印象は否めない。著者の力点は別の主題——神学や道徳——に置かれているからである。

島には100人の「グレビール」と呼ばれる評議員から成る共和国評議会があり、法律の作成を主要な仕事としている。島は幾つもの居住区に分かれ、それぞれに2人の「カリユード」と呼ばれる監督がいる²³⁾。この監督役と高齢者を除き、グレビールを含む全住民に労働の義務があり、医療に専念する医者以外は、晴天の日は午前と午後各2時間半ずつ土地の耕作等の労働に従事する²⁴⁾。人が中に入って回転させる車輪型の大耕耘機や、荷物の運搬機といった考案が目を引き²⁵⁾。農閑期は、何らかの手仕事に当てられる。農産物も手仕事の製品も社会全体の共有物であり、必要に応じて分配される²⁶⁾ので、島に貨幣は存在しない。先に述べたように、住民は固有の名前をもたず、居住区とそこで生まれた順番によって決まる自分の番号をもつに過ぎない²⁷⁾。

¹⁹⁾ *Ibid.*, p. 64; 同書、87頁。

²⁰⁾ *Ibid.*, pp. 8-9; 同書、13頁。

²¹⁾ *Ibid.*, p. 9; 同書、14頁。

²²⁾ *Ibid.*, p. 3, p. 34; 同書、3頁、55頁。

²³⁾ *Ibid.*, p. 19; 同書、30頁。

²⁴⁾ *Ibid.*, p. 32; 同書、51頁。

²⁵⁾ *Ibid.*, p. 31; 同書、50頁。

²⁶⁾ *Ibid.*, p. 32; 同書、51頁。

²⁷⁾ *Ibid.*, pp. 20-21; 同書、32-33頁。

家柄の貴賤や身分の上下の存在しないカレジャヴァでは、結婚は男女の好みを尊重して決定され、日を決めて一度に式が挙げられる。アヴァ人にとって結婚は義務であり、独身は許されない。人間の最大の務めは子孫を生み増やし、できるだけ多くの人間に幸福を分かち与えることにあるので、生まれ出る機会を与えず、存在を永遠に虚無の内に閉じこめてしまう独身状態は、殺人にも勝る重罪とみなされるのである。同じ観点から、多産を目指して一夫多妻制がとられている。ただし結婚は神聖視されているわけではなく、正当な理由か双方の合意があれば離婚も認められる²⁸。

子供は4歳で全員親元を離れ、15歳まで専門の教師による義務教育を受ける。子供たちの行動を導くのは、ここでも理性でなければならない。学課には読み書き、音楽、神学、道徳、自然科学などがあり、15歳になると、学問に適性をもつ者が選別され、神学者、哲学者、数学者、語学教師、医者などが育成される²⁹。およそ以上が、カレジャヴァの社会制度のあらましである。もちろんカレジャヴァの平等社会には、画一的な統制、固有の名前すらもたぬ国民の非個性化など、ユートピアの暗部も確かに存在する。しかし同時に、過酷さを増す絶対王制と身分制社会への批判的対案を、カレジャヴァの制度に読みとることを忘れてはなるまい。

IV カレジャヴァ国の宗教と道徳

アヴァ人の国で彼らと折り合って暮らしていくために、ヨーロッパ人一行に提示された条件は、ただ「神の存在と靈魂の不滅と来世での賞罰を信じる」ことであり、しかもこの真理を「権威によってではなく、堅固で自然な理由によって納得³⁰」しなければならない。人々の精神に深く根をおろしている権威を減ぼし、それに代わる案内者として理性に従うこと——これがカレジャヴァ島の住民にまず求められる資質である。理性に従うとは、明晰で明白な原理だけを拠り所とし、同じく明晰で明白な推論だけを經由させて結論を導くことに他ならず、このとき人は誤ることがない³¹。これはデカルト的明証の規則の実践に他ならないが、アヴァ人と来訪者たちは、この規則をデカルト自身が慎重に適用の除外例とした宗教的領域に用いることも躊躇しないのである。

権威を覆し、唯一の道案内として理性が立てられた（第2巻）後、主にアラートルのリードによって、神の存在と靈魂の不滅の証明が試みられる。その過程で無神論や汎神論が退けられ、心身結合をめぐる疑問にも回答が与えられる（第3～4巻）。これを受けて第6巻では、アヴァ人

²⁸ *Ibid.*, pp. 32–33; 同書、53–54頁。

²⁹ *Ibid.*, p. 34; 同書、55–56頁。

³⁰ *Ibid.*, p. 9; 同書、14頁。

³¹ *Ibid.*, p. 16; 同書、26頁。

の神学者による講義が紹介される。その中核となるのは、非キリスト教的理神論と、それに基づく道徳論であるが、これを概観するには、ジルベールが自著に書き入れたと思われる「理性的な宗教の草案」12箇条に依るのが便利である。校訂版の編者リヴィエールによれば、これは「理神論的信仰告白³²」とでもいうべきもので、著作の内容と深く関わっている。

- 1 普遍的な原因としての神が存在すること。
- 2 神は全能であり、独立した存在であること。
- 3 神は世界と被造物を創造したこと。
- 4 神は自ら定めた自然の掟に従い、自らの摂理によって世界を保持し統治すること。
- 5 神は世界を精神と物体に作りなしたこと。
- 6 精神は永遠に生きるために、物体は時間のなかで死ぬために [作られた]。
- 7 神は世界を愛し、被造物が互いに愛し合うのを望むこと。
- 8 神は被造物を些かも必要としないこと。
- 9 被造物は神なしには存続しえず、また互いに他の被造物なしにも存続しえないこと。
- 10 神は自然の掟により被造物に相互的な義務を課したこと。自然の掟はすべて隣人愛、すなわち相互愛に基礎を置き、我々は神の作品を保持するために相互愛の義務を負っていること。
- 11 神は善人には報酬を、悪人には罰を定めたこと。
- 12 神への信仰とは、良心、理性に他ならず、それを実践しそれに従うことによって、我々の行いは正しいものとなること³³。

以上の「草案」は、アヴァ人の神学の格好の要約ともなっている。彼らの神は宇宙を創造し、普遍的法則によって世界を統括する神であり、それ以上に個別的意志をもって人間世界に干渉することのない、人間世界とは完全に独立した存在である。この神は人間に対して煩わしい宗教的儀式など求めないし、そもそも、人間の側が神のためになしうることなどひとつもない³⁴。アヴァ人は精神的な行為としてのみ神を礼拝することで満足し、寺院も聖職者も宗教的儀式も必要としない³⁵。神はまた、特定の個人や王侯や民族を偏愛したりすることもない。ここでは奇蹟も選民思想も明確に否定されている³⁶。

³² *Ibid.*, p. VIII.

³³ *Ibid.*, pp. VIII-IX.

³⁴ *Ibid.*, p. 36; 『カレジャヴァ』、57頁。

³⁵ *Ibid.*, p. 46; 同書、75頁。

³⁶ *Ibid.*, pp. 40-41; 同書、65頁。

こうしたアヴァ人の神学から、現世における人間の道徳が引き出される。神は人間をただ善意から創造したのであるから、創造の目的は人間が幸福になること、万人が等しくその恩恵に与ることの他にはない³⁷。それ故、自分の罪に起因しない現世での幸不幸は来世で埋め合わされるし、現世で罰を免れた罪も来世では報いを受けずにはすまない³⁸。

善なる神は人間が現世でも来世でも幸福であることを望む。では神はなぜ最初から人間を来世に置かず、現世に創造するのであろうか。第10巻でこの問題が論じられるが、アヴァ人の答えはやや意表を突くものである。まず心身結合としての人間は、現世において、拡がりをもつ実体（物体）の観念を魂に強く植えつけるが、甘美な快感を伴うこの観念が来世の幸福に寄与することになる。この物体の観念を得るために、人間はこの世に生まれ出るのでとされる。次に人間は種の保存のためにも、まずもって現世に生まれ、子孫を生み増やさねばならないのである（第1～2の対話）。この世の認識のもたらす喜びと生殖を現世での2大目的とするこうした考えは、神の認識と神への愛を目的と説く神学的伝統との断絶を意味している。

こうして人間は、現世でただ幸福になろうとのみ努めるべきであり、「人間は悲惨のなかで生きるために生まれてきたなんて原理を立てるのは誤り³⁹」である。ただし自己の喜びを求めることで他人に害を与えてはならないし、利益は所有者から非所有者へ譲渡されることによって、「相互愛の美しい絆⁴⁰」を形成すべきである。正当な手段で獲得する限り、地上での幸福追求は完全に肯定される。もちろん幸福とは享楽に溺れることではなく、穏やかで自足した内的な喜びの意味なのである⁴¹。

V カレジャヴァ国と共生の原理

リヴィエールも指摘するように、ジルベールのユートピア物語には、醜悪な現実からの逃避場所としての面よりも、社会的不正に対する積極的な批判と矯正の意図が強く認められる⁴²。では、そこにはいかなる現実批判と見果てぬ夢が仮託されているのであろうか。前節までの検討を踏まえ、政治的・社会的側面と宗教的側面について整理しておこう。

政治的には、この島は800年以上昔から市民平等の共和制をとり、王も貴族も存在せず、いかなる身分上の差別もない。すべての法を制定する共和国評議会以外に、どんな権力機関も存在しない。しかも「グレビール」と呼ばれる100人の評議員だけが立法行為にたずさわるのではな

³⁷ *Ibid.*, p. 41; 同書、66頁。

³⁸ *Ibid.*, p. 43; 同書、69–70頁。

³⁹ *Ibid.*, p. 58; 同書、84頁。この記述は、「神なき人間の悲惨」を論ずるパスカルを想起させる。

⁴⁰ *Ibid.*, p. 41; 同書、67頁。

⁴¹ *Ibid.*, p. 58; 同書、84–85頁。

⁴² *Ibid.*, p. XIV.

く、法律制定の手続きはきわめて民主的で、住民参加の慎重な合議によっている。関連部分を引用してみよう。

法律の制定には、以下のような手順が踏まれる。まずグレビールが法案を二人の「カリュード」と呼ばれる各居住区の監督に提案し、この監督が各人に話を伝える。住民相互の協議を経て、三度目の満月の日に人々は自分たちの意見と理由を監督に述べる。居住区ごとのカリュードがグレビールに報告をすると、グレビールはそれを踏まえて議論し、満場一致の場合には決定を下す。そうでなければ法案は未決のまま据え置かれる。とはいっても、この100人が意見の一致を見るのは難しいと考えてはならない。[……] 法律ができあがると、カリュードは自分の居住区の構成員に対し、施行の一月前に告知する。この期間に各人は他の住民に新法の優れたところを説得しようと努めるのである。誰もグレビールに服従しているとは思っておらず、グレビールはグレビールで、自分たちも他の者同様、理性という主人に仕えているのだと言っている⁴³。

社会制度上も、第Ⅲ節で見たように、労働、分配、教育、結婚など、あらゆる面において可能な限り市民間の平等がたらぬかれている。しかし必ずしも悪平等というのではなく、高等教育の付与や職業の選択などには適性が尊重されていた。一方、労働も教育も結婚も義務として課されるため、その画一的な統制を免れる自由は存在しない。こうしたユートピアの暗部が存在することも、既に述べたとおりである。

もちろんこのようなカレジャヴァ国の体制は、現実のフランス絶対王制とは相容れないものであり、共存不可能な理想郷である。島が外的の侵略に対して防衛の準備を怠らないのも、こうした対立意識の反映に他なるまい。作品における政治的・社会的な主張の大胆さも、虚構の物語のなかで理想を語るだけですみ、現実的な改革案の提示を意図していないことと関係がある。ヨーロッパ社会における制度変革への意志は、具体的プログラムの検討が多少とも可能性を帯びるにつれて、虚構から現実の場へ降りてくるはずである。それにはまだしばらくの年月が必要であり、ユートピアと現実の国家とは、当面は共存不可能な、背反し対立する存在であった。

この意味で、ヨーロッパへ帰国するクリストフィルとサミエスキに対し、アヴァ人が最後に与える忠告が注目される。カレジャヴァ国の準則をヨーロッパ社会でどのように生かすべきかについて、アヴァ人は述べる。どのような法であれ、現行法には従うべきであり、さもないと市民社会が崩壊してしまう⁴⁴、ただし「不正な為政者にはうわべでは従い、外面的な敬意だけ捧げてお

⁴³ *Ibid.*, p. 19; 『カレジャヴァ』、30-31頁。

⁴⁴ *Ibid.*, p. 79; 同書、114頁。

く⁴⁵」のがよいと。この面従腹背のすすめにつき、為政者の義務について次のように語られる。

「そうした〔内面的な〕敬意に値する者となるために、為政者に知ってほしいのは、民は悲惨と卑賤をもって彼らの安逸と高慢にへつらうためにあるのではなく、彼らの方こそ、法を守り支え、英知によって民の安らぎと幸福に役立たねばならないということです。警戒、厳格、厳正は良き秩序を維持し、為政者の不当な寛容は、罰を免れうると当て込んで犯されるあらゆる罪に責任があります。すべての権力と権威は、ただ民の自発的な服従にのみ由来するので、この同じ権威は、民に対して完全に献身的であるべきなんです。一方個人の側は、骨の折れる職務を果たす為政者たちを敬意と服従によって助け、自分たちの側でなしうる限りの説明、とりわけ証言を（求められずとも）提供する義務があります⁴⁶。」

ここには、理想から遠い現実を生きるヨーロッパ社会の、為政者と国民の間にあるべき関係をめぐる、作者の真摯な主張が込められています。

共生思想の歴史的展開という観点から、いっそう検討に値するのは、『カレジャヴァ物語』の宗教観であろう。作品の山場のひとつ、第11巻「キリスト教とアヴァ人の習俗および意見との比較」において、島を訪れた4人のヨーロッパ人は異なる2つの道を歩むことになる。クリストフィルとサミエスキは、それぞれキリスト教とイスラム教の信仰に固執して「不信心の徒」の国を離れる決意を固めるが、アラートルとウッドクスの夫婦は、むしろ自らの信仰を修正し、聖書に新解釈を加えても、島の宗教との調和を模索して共存の道を探ろうとするのである。そこでこの巻では、既存の宗教の批判を踏まえたキリスト教の新解釈と、異なる宗教間の共存という、2つの重要なテーマが論じられることとなる。

第1の点から見ていこう。ウッドクスとアラートルは、カレジャヴァでの見聞を通して、島人の習俗がキリスト教の教えとそれほど矛盾しないばかりか、両者には一致点こそ多いことを発見していく。両者の結節点となるのはここでも理性であり、理性を至上の掟とするアヴァ人の生き方と福音の教えとは別のものではないとされる。例えば聖書のなかで、イエス・キリストは「この世に生まれるすべての人を照らす真の光」（ヨハネ、1の9）、あるいは「世の光」（同、8の12）と呼ばれているが、ウッドクスによれば、「この世のいっさいを照らし、偶像崇拜者だろうとマホメット教徒だろうと、この世に生まれてくる人なら照らす光なんて、理性の他に」はない。理性が教える自然法は、「どの点で福音と異なっているんでしょう。異邦人たちの使徒〔パウロ〕は、『異邦人は律法をもっていないが、律法が命ずることを自然のままで行っている。律

⁴⁵ *Ibid.*, p. 81; 同書、116頁。

⁴⁶ *Ibid.*; 同上。

法を実行する者が義とされるであろう』(ローマ、2の14)と言っています⁴⁷。理性に従い善をなす者こそ義人であり、律法を知っているか否かは重要ではないというのである。こうして、正しい理性に従って生きる者は、「暗黙のうちにキリスト教徒」であり、「単にうわべの信仰しかもたず、反省も知識も欠いたまま、儀式や迷信にはまりこむ者よりも正しい道に⁴⁸」あるのだとされる。

こうした見方に立って、アヴァ人の習俗が次々と弁護されていく。まず、いっさいを共有し、皆が平等に暮らす彼らの生活は、イエスの教えと原初のキリスト教の純粹さに適っている⁴⁹。また、一夫多妻や離婚という一見聖書の教えに反するカレジャヴァの制度や、安息日と断食の否定も、ウッドクスの詳細な聖書の援用によって容認しうるものとなる⁵⁰。アラートルも「キリスト教の本当の準則がしっかり身についた学者なら、これこそ聖書の真の意味だとみなすことだろう⁵¹」とウッドクスに賛同する。2人は、理性の原理による聖書の批判的検討の実行者なのである⁵²。

神と隣人を愛せよというイエスの基本的な戒律の解釈も注目される。神への愛とは神の掟への服従に他ならず、神が隣人への愛を命ずる以上、隣人愛の実践こそ神への愛に他ならない。一方、隣人愛の実践から離れて無為な生活にふける聖職者や修道僧たち、「あの怠惰な黙想家たち⁵³」は、イエスの教えに背くものとして厳しく批判される。結局2つの戒律は、第2の戒律(隣人愛)ひとつに帰着する。これは無償の純粹な神への愛という考えに対立するものであり、キリスト教を一個の道徳に還元するのに等しい⁵⁴。ジルベールによる「理性的な宗教の草案」第12条そのままに、ここで宗教は道徳に、道徳は幸福の追求と相互愛とに行きついている。このような新解釈を施されて変容したキリスト教は、もはやアヴァ人の信仰と大きく矛盾するものではなくなるのである。

アヴァ人の側も島への受け入れ条件として、神の存在と靈魂の不滅と来世での賞罰という3点を認めることしか求めない。彼らの非キリスト教的でまったく理神論的な神は、理性の權威が確立された後に、完全に理性的な原理に依拠して証明されるのであった。長々と続く彼らの証明と神学論議の当否はさておき、アヴァ人の姿勢は「脅迫と刑罰を用いる」ヨーロッパ的改宗の強制

⁴⁷ *Ibid.*, pp. 65–66; 同書、90頁。以下、引用文中での聖書からの出典指示は、原注に基づく。ただしジルベールによる引用は、現行の聖書の訳文とかなり相違している場合も多い。

⁴⁸ *Ibid.*, p. 66; 同書、91頁。

⁴⁹ *Ibid.*, pp. 66–67; 同書、92–93頁。

⁵⁰ 一夫多妻制、離婚、安息日、断食について、それぞれ次を参照。*Ibid.*, p. 69, pp. 69–71, p. 67, pp. 72–73; 同書、97頁、97–101頁、93頁、102–104頁。

⁵¹ *Ibid.*, p. 76; 同書、110頁。

⁵² *Ibid.*, p. XXIII.

⁵³ *Ibid.*, pp. 76–77; 『カレジャヴァ』、110頁。

⁵⁴ Cf. *Ibid.*, p. XXIV.

とは対極にあり、理性的な説得を旨としている。前節で見たアヴァ人の信仰と、これに同調してゆくアラートルおよびウドクスの側に、作者の最終的な立場が託されているのは明らかなのである。

次に、第2のテーマ、異なる信仰の共存と共生をめぐる作者の思想を、第11巻冒頭部に即して探ってみよう。まず、信仰を異にする者同士は、それを理由に袂を分かつ必要など少しもないとされる。クリストフィルは「不信心の徒」の島を離れる根拠としてパウロの言葉（「彼らのなかから出よ、彼らを離れよ」、第2コリント、6の17）を引くが、それに対してアラートルは、「問題の箇所、聖パウロはただ信者たちが不信仰者の儀式に従うことを禁じているに過ぎない」と述べ、次のように論じる。

「聖パウロは、不信仰者から体であれ、さらには心であれ、引き離す必要など少しも主張していず、信仰ある妻が不信仰者の夫のもとを去ったり、不信心の罪の故に夫が妻と別れたりすることなど望んでいません。意見が異なるからといって、仲間割れすべきなんですか。[……] 異端説のために、互いに反目すべきなんですか。アリウスがイエス・キリストは神の庶子か養子だと考えたところで、神にも人間にもたいした問題じゃありません。サマリア人に助けられたユダヤ人（ルカ、10の28～）のたとえが示すように、どんな宗派の者であれ、私には愛する義務があります。かつてのユダヤ人に対するサマリア人の関係は、今の正統派に対する異端の関係にあたります。イエス・キリストがユダヤ人つまり正統派に望んだのは、祭司やレビ人をさしおいても、サマリア人つまり異端者を、自らの隣人、すなわち愛を注ぐ相手とみなすことでした。[……] こういうわけで、たとえ異端者を我々の敵、邪悪で不正な者とみなす場合にも、我々は彼を愛し、彼によくしてやらねばなりません。自ら範を垂れるために、イエス・キリストはためらうことなく、ユダヤ人よりもまずカナンの女に恩恵を施されたのです（マルコ、7の26）⁵⁵。」

ここには信仰を異にする者同士の共存と相互愛の明確な主張が認められる。

共存の理想は当然の帰結として、力による信仰の強制を否定する。この点では、自身祖国での宗教的迫害を逃れてきたクリストフィルも、完全に同じ意見である。彼は「私だって人が偽りだと思っている宗教を、良心に反して無理やり信じさせようとし、論拠をあげて説得するかわりに脅迫と刑罰を用いる輩には、全く反対だよ」と述べ、良心の自由を次のように擁護している。

「聖パウロは各自が完全に納得した上で行動するように望んでいる（ローマ、14の5）し、

⁵⁵ *Ibid.*, pp. 64–65; 『カレジャヴァ』、88頁。

すぐあとでつけ加えて、『なすべきでないと思いながらなすことはすべて罪である』(同、14の23)と言っている。福音によってどんな脅しを受けたにせよ、トルコ人が正しいと信ずる自分の宗教をキリスト教と取り替えたりしたら、それが罪になることを疑う人はあるまい。同じ使徒は、『自らなそうと思うことについて、良心の咎めを受けない者は幸いだ』(同、14の22)とも言っている。自分の意見なり良心なりに背いて振る舞うように人を強いることは、彼らに罪を犯させ、自分でも罪を犯すことだ。それ故、どんな意見をもつのもめいめいの自由にまかせるのが、良心に照らして我々の義務なのだ⁵⁶。』

先に見たように、キリスト教が道徳に還元され、義人とは理性に従い善をなす者の謂いとなれば、宗教の有無も、信仰の種別ももはや意味をもたず、異教徒も異邦人もキリスト教徒と異なる存在ではなくなるであろう⁵⁷。アラートルは、この点に関する多くの宗教家の言明を引用する。例えばツヴィングリは、「永遠の命は、割礼もしくは洗礼を受けずには得られないという条件で約束されたのではない。だからそうしたしるしによって聖別されていない者に、地獄墮ちの罰を科すのは軽率であろう⁵⁸」と述べている。また、「ユスティノスはソクラテスやヘラクレイトスのことを、正しい理性に従って生きたからという理由でキリスト教徒と呼び」、「アレクサンドリアのクレメンスは、哲学がギリシア人を義としたと言ったし、聖エピファニウスはモーゼの律法も福音の法も知らずに救われた者があると考えた⁵⁹」のである。さらに、「ローマ教会に属する何人かの現代の神学者も同意見で、古代の偉人たちを、理性に従った点においてはキリスト教徒であり、救いに与ったと考えた⁶⁰」という。これら偉人たちは洗礼こそ受けていないが、その「心と精神の正しさが、洗礼の代わりにならないとしたら、神は善たりうるでしょうか、残酷でないといえるでしょうか」とアラートルは問い、ウードクスが次のように補足する。

「だからこそ、聖ペテロは『洗礼は水で体を浄めることではなく、神において、正しい良心が我々になす問いかけにある』(第1ペテロ、3の21)と言いました。[……] 洗礼を受けるというのは、水で浄められることというよりは、むしろ内面を照らし出され、行為のたびごとに立ち止まって、それが正しい行為か不正な行為か神に尋ねるようになることだということです。このとき人は、自由を正しく行使した後、良心に照らしてなすべきだと判断することは何でしようという気持ちになっており、それは暗黙のうちにキリスト教徒であることで

⁵⁶ *Ibid.*, p. 65; 同書、89頁。

⁵⁷ Cf. Lachèvre, *op. cit.*, p. 212.

⁵⁸ *HC*, p. 66; 『カレジャヴァ』、90頁。

⁵⁹ *Ibid.*; 同書、90-91頁。

⁶⁰ *Ibid.*; 同書、91頁。

す。暗黙の信仰であろうとも、単にうわべだけの信仰しかもたず、先例に引きずられ、反省も知識も欠いたまま、儀式や迷信にはまりこむ人たちよりは、正しい道に立つことができるはずです⁶¹。」

こうして「暗黙のキリスト教徒」「暗黙の信仰」としての道徳的正しさ、「心と精神の正しさ」が、宗教的相違を超えて共生を可能にする原理のひとつとされるのである。

作者の宗教的相対主義と寛容の精神が、異端のみならず、キリスト教以外の宗教、あるいは無宗教にまで向けられていることは重要である。「キリスト教徒がマホメット教の証拠を吟味するのに苦勞するからという理由で、これを拒絶する権利があるのなら、トルコ人にだってキリスト教をはねつける権利が同じだけあるというものさ⁶²」といったアラートルの言葉、無宗教が必ずしも放蕩の原因にならないどころか、「宗教なんてもたなくても有徳な生活を送れる⁶³」とか、「偽りの宗教の方が、無宗教より大きな災いを引き起こす⁶⁴」など、随所に見られる発言も、作者の思想を明示している。そこには次代の啓蒙思想に通じる考えが、確かに準備されているのである。

Ⅵ 結語

ジルベールが同時代の種々の思想的潮流に通じていることは第Ⅰ節でも述べた。リヴィエールの指摘するように、彼のうちにはとりわけデカルト―マルブランシュ経由の合理主義と、ベールーフォントネル流の批判的検討の精神が息づいている⁶⁵。『カレジャヴァ物語』には、こうした原理的思考法に立って、地上の幸福の全面的な肯定、聖書の人間主義的解釈、当代の教会制度や宗教儀式の批判、法と相互愛を基盤とする市民社会の理想等々、新しい時代を予告する実践的テーマが豊富に詰め込まれている。なかでも、最小限度の前提を共有する限り複数の信仰の共存を認め、さらには無宗教に対しても寛容の精神を及ぼす考え方は注目すべきである。この作品のみならず、一連のユートピア物語は、近代ヨーロッパにおける共生思想の歴史的展開を考察するにあたり、重要な検討対象となるであろう。

61 *Ibid.* ; 同上。

62 *Ibid.* , p. 10 ; 同書、16頁。

63 *Ibid.* , p. 22 ; 同書、37頁。

64 *Ibid.* ; 同上。ただしこれはルクレティウスの援用。

65 *Ibid.* , pp. XVI–XVII.

使用テキストと翻訳

『カレジャヴァ物語』の刊本には、次の3種がある。

- (1) *Histoire de Calejava ou de L'Isle des Hommes raisonnables. Avec le parallele de leur Morale et du Christianisme*, M. DCC [1700].
- (2) *Histoire de Calejava ...*, Paris, Editions d'Histoire Sociale, 1970.
- (3) Claude Gilbert, *Histoire de Calejava ou de L'Isle des Hommes raisonnables*, édition critique par Marc Serge Rivière, University of Exeter, 1990.

(1)はフランス国立図書館に1冊のみ現存する初版本、(2)はその写真復刻版である。本稿の執筆にあたり底本としたのは(3)であり、これは編者による序文と注が付された校訂版である。ただしこの版の本文校訂については、原著の誤記や誤植をそのまま残す一方で、原文の脱落や読み誤り、原注における出典指示の誤りの未訂正などが散見され、必ずしも良版とはいえない点がある。

翻訳には次の2種がある。

- (4) 『カレジャヴァ物語』、野沢協・小林浩訳、『啓蒙のユートピア』、第1巻、法政大学出版局、1996年
- (5) 『カレジャヴァ物語』、永瀬春男訳、『ユートピア旅行記叢書』、第5巻、岩波書店、1998年

(4)は全訳であるが、(5)は全体の約8分の1を省略してある。本稿での引用には(5)の拙訳を用いたが、一部変更した箇所もある。(3)の誤記や誤植について、拙訳では可能な限り改めてある。